

【巻頭言】

紡ぎ、繋いできたもの



編集委員長 鈴木 量(短1回生)

編集委員長をしております、本部理事 3 期目の短大 1 回生の鈴木 量と申します。新しく元号が昭和から平成へと移り変わり、その年の平成元年 4 月に京都医療技術短期大学の 1 期生として入学し、平成 4 年 3 月に卒業後、企業立病院の関西電力病院に入職し、現在に至ります。

本部理事のお話をいただいたのは、玉田前会長からのお電話でした。突然のご依頼だったことを未だに覚えております。考えてもいないことだったので、後日改めてお返事させていただく運びとなりました。その間、本部理事を引き受ければ大阪支部の次の大役は免れる、といった邪な考えから、本部理事を引き受けました。1 期目の理事としての仕事は、編集委員として学友だよりに携わることで、当時の編集委員長は、大阪支部でお世話になっておりました山村 憲一郎(60 回生)先生でしたので、楽な感じで携わっておりましたが、そんなことは長く続くことはなく、2 期目は京都医療科学大学で Zoom での学友会総会の資料で、初めて私が編集委員長になっていることに気づきました。突然の拝命で、私自身気持ちの整理がつきませんでした。ともあれ学友だより次号からは、編集委員長として実直に取り組んでいこうと考えていたところ、学友だより 241 号の投稿がなく、支部総会、同窓会の延期や中止のおしらせしか届いていなく困惑しましたが、何とか写真等々を拡大し、学友だよりを発行しました。直前の理事会で「写真ばかりの学友だよりはどうかと思う。寄稿という形で、お声掛けをして会員だよりを書いていただけたらどうか？本学の卒業生は優秀な人材が沢山いるので」と助言を受け、理事、編集委員の皆様からお声がけをいただき、242 号の学友だよりからは、会員だよりとして掲載していくことができました。このような困難を克服できたのは、寄稿していただいた優秀な先輩ならびに後輩の皆様のおかげでございます。この紙面をお借りしましてお礼申し上げます。寄稿は現在も随時受け付けており、学友会の趣旨を理解され、投稿していただければ幸甚でございます。

昨年の 5 月より行動制限が緩和され、広島での学友会総会を皮切りに、奈良、長崎・佐賀、北海道、大阪、滋賀、京都、兵庫、東海、大分といった支部総会の開催報告や予定、同窓会の予定等々、以前の学友だよりに戻ってきたようで安堵しております。地方支部あつての学友会組織です。地方で働いているからこそ大学に通っていた良さに気づき、規模が大きくないからこそできる絆もあると思います。若い会員の皆様の中には「人とのつながりがなんか面倒くさい」と思っておられる方々もいると思います。新型コロナウイルス感染拡大により、人とひととのコミュニケーションの希薄化が進んだことが大きいと思われまます。「学友会に参加するメリット(付加価値)は？」と聞かれることがあります。世代間、集団と集団との認識や価値観のギャップ(距離)は至るところにあります。私の主観(たわごと)になりますが、どんな職種でさえも、一人ひとりが持つスキルや経験は年々、多様性を増しています。目の前の課題を考え過ぎるあまり、いつまでも行動を起こさないとチャンスを逸してしまいます。本学の学友会には、経験豊富で優秀な先輩、後輩の皆様が沢山おられます。課題解決方法など問うてみたらいかがでしょうか？忌憚のない質問や意見でも構いません。諸先輩方は器の大きいかたばかりです(笑)。

最後になりますが、編集作業をしていて再度、気づかされたことがあります。会員だより等々で最後に、感謝を述べられているのですが、当時の恩師の先生方はもちろん、同じ学び舎で同じ時を過ごした学友に謝辞を述べられております。「皆がいたから、お前らが一緒やったから今があるんだ」といった感じですね。私も同じマインドです。この感覚は他の大学では味わうことのない感覚かもしれません。学友だよりの現在の形が、今の私のベストエフォートです。もうしばらくお付き合い下さい。

以上